

学級開き時の集団育成に関する一考察 —アイスブレイキング活用プログラムの開発を通して—

佐野 泉

A Study Concerning Group Training at the Start of School [Remark 1]
— Through the development of an ice breaking application program —

Izumi SANO

近年、小学校においては、全国的に毎年度学級編成替えを実施する学校が多くなっている現状がある。先行研究では、学級開き時（4～5月）には、どの学年においても仲間関係に注目すべき課題が示唆されている（佐野2012）。

このことを踏まえ、本研究では、特に児童の緊張を余儀なくされると想定される4月に限定し、朝の会で実施する学級集団育成に寄与すると想定される仲間関係育成プログラムを開発した。プログラムには、学級集団形成初期の段階において、学級の雰囲気を支的風土に導くための有効な手段のひとつと考えられているアイスブレイキングを導入した。

作成したプログラムは、児童の発達段階と先行研究で導出された課題を考慮し、6学年を低学年・中学年・高学年の3ブロックに分けて構成されている。また、いずれも第一日目については図を交えながら具体的に示し、その後実施するものについては文章化して示した。

I. 問題と目的

(1) 問題

近年、小学校では毎年度学級編成替えを実施する学校が多くなっている。児童は進級を重ねるたびに新しい学級構成員と出会い、新たな仲間づくりを始めることになる。学年が上がるにしたがって、新しい学級構成員のなかに知り合いは増えてくるものの、こうした環境の変化のなかで、児童は、どの学年にあっても、学級開きの4月は過度な緊張を余儀なくされることが報告されている（野呂2008）。学級集団の仲間関係を育成するためには、まずはこの緊張をほぐす必要がある。これは、「学級づくり」において特別活動が担う役割の一つであるといえる。また、児童の緊張をほぐし、新たな学級生活に適應できるように援助することは、担任教師の大きな役割である。教師には児童の発達や実態を考慮しながら、適切な教

育活動を展開することが求められている。

アイスブレイキングは、児童一人ひとりの過度の緊張や、学級集団の緊張を解きほぐす効果があるとされている（犬塚2000）。学級集団形成初期の段階における構成員同士の交流が少ない状態では、アイスブレイキングの導入は学級の雰囲気を持地的風土に導くための有効な手段である。ゲームなどを活用することによって、児童が楽しみながら友好関係の形成を促進させることができるとともに、教師にとっても、教育活動に容易に組み入れていくことができるという利点を併せもつ。本研究では、児童の緊張を解きほぐすために、アイスブレイキングを活用したプログラムを作成することで、学級開き時の学級運営を円滑にする手立てを講じる必要があるとの問題意識を出発点としている。

（2）本研究の目的

本研究は、アイスブレイキングの導入が、個々の子どもや学級集団の緊張を解きほぐし、仲間関係の形成を円滑にすすめる効果をもつとの先行研究を元に、近年毎年クラス替えをすることで学級開き時に起こる緊張をほぐすための手立ての一つとして朝の会などで実施できるプログラムを開発することを目的としている。

はじめに、質問紙調査結果（佐野2012）から得た情報を元に、子どもの実態を把握する。

佐野（2012）によれば、学級開き時（年度当初4月～5月）には、どの学年にも仲間関係において注目すべき課題が示唆されている。具体的には、①1年生においては、質問項目全てに仲間関係に関する課題がある。②低学年及び高学年においては、「必要な時にはっきりとした声で発言する」ことに課題がある。③低学年及び中学年においては、「仲間の目を見て話をしたり聞いたりする」ことに課題がある。④全学年を通して、「仲間の話を最後まで聴く」、「不当な扱いを受けている仲間をかばったり守ったりする」、「不適切な行動をしている仲間を止めたり諫めたりする」ことに課題がある。⑤5年生において「自分から仲間に話しかける」ことに課題がある。以上の5点において指導支援が必要であるとしている。佐野の悉皆による調査では、A市立公立小学校教諭を対象にし、小学校全学年において学級開きの時期での児童の様子を訪ねている。このことから、学級開きの段階では、児童一人ひとりへの指導支援、及び集団としての傾向を把握し、支援の方向性を定めていくことが大切であると考えられる。そこで、導出された課題と自助資源は、学級を持地的風土に導くために活用するアイスブレイキング作成の際の検討材料とし、児童の実態に基づいて、一日の始まりの会として重要な朝の会において活用できるアイスブレイキングプログラムを発達段階ごとに作成する。

II. 児童の発達段階を考慮したアイスブレイキングの導入

本研究では、小学校全学年を対象としていることから、低学年・中学年・高学年の発達課

題を考慮し、導入に向けて検討する。

低学年については、個人によって知識量及び五感に代表される身体的発達の差が大きいと想定されることから、犬塚(2000)が示すアイスブレイキングの実施形態①心理トリック図版を示す(錯視図形など)②声を発する(替え歌・舌噛み早口言葉など)③身体を動かす(リラックス体操・ランダムウォーキングなど)④心理ゲームを行う(頭の体操)の内②及び③に重点を置き、実施することが有効であると考えられる。また、幼児教育において既習のゲームや遊びを実施することによって更にアイスブレイクされる可能性が高いことから、②及び③を実施する際に、児童が幼児教育において経験を重ね、周知しているゲームや、じゃんけん・握手といった身体表現を取り入れていくことで更なる効果が期待できると考える。

中学年については、親と子・教師と児童という上下関係(縦の関係)よりもむしろ仲間関係という水平関係(横の関係)の方が重視され、仲間との不一致や仲間からの評価に敏感になる時期であることから、仲間との関わりをより深めるためのプログラムの開発を試みる。更に、学習面においては知的好奇心が旺盛になり、自主的・積極的に課題に取り組む児童が現れてくる最初の時期であること(Gesell, A.1967, 吉田1990)を考慮し、犬塚(2000)が示す①～④の中の①と②(早口言葉など)及び④の初歩的な内容を重点的に取り入れ、実施する。

高学年になると、大人の権威から離れて自分の行動原理がもてるようになり、生活行動も自主的判断に基づいて行うようになるとされ(吉田1990)、それまでの依存的な態度は減少して自立的な態度が見られるようになることから、犬塚(2000)が示す①及び④を重視する。全体を通して「話す(自己開示)」「聴く(傾聴)」のプログラムを織り込み、仲間関係促進のためのスキル形成を試みる。この段階では、自我意識が芽生えることにより、児童は自分を体力・体格・能力・学力などいろいろな面から考えるようになり、周囲を意識し始めることから、他者からの視線や他者と自分との相違などを気にするようになることを考慮する必要がある。

学童期は、自分自身を客観的に観察する能力が発達し、同時に自分に対する他者からの評価を意識するようになってくる時期であると言われている(大場他1992)。学童期に課せられている発達課題として、考えられるのは次の二点である。

一点目は「学ぶ」ということの基本的な態度を身につけること、二点目は社会性を身につけることであるとされている。課題としてあげられている同学年の同一化は、仲間関係を通して獲得されるものである。児童は仲間関係を通してルールを守ること、情緒をコントロールすることを学び、自我意識も形成され、自己についての正しい評価が出来るようになってくる。この時期に課題の達成が不十分なままであると、その後において他者との良好な関係を構築しにくく、対人関係において不適応に陥りやすいとも言われている。

Shure, M.B., & Spivack, G. (1972) は、児童における社会的問題解決について研究し、適応的な子どもは、問題を解決する際、配慮や計画性豊かな手の込んだ方略、起こりうる障害の予期、時間への考慮について、不適応な子どもに比べてより思考していることを明らかにした。

これらの結果から、よりよい適応は、手段—目的—思考における認知能力と関連していると言える。つまり、豊かで選択性に富んだ問題解決方略は、他者とうまく適応する重要な役割となることが考えられるため、特に仲間関係構築に困難を来す児童にとっては、この時期にアイスブレイキングを導入し、楽しみながら仲間関係形成を促進させることを支援することは重要であると考えられる。

Ⅲ. 低学年・中学年・高学年児童の発達とプログラム構成

児童の課題として調査結果に示された5つの課題である、①1年生において仲間関係に課題があること、②低学年及び高学年においては、「必要なときにはっきりとした声で発言すること」、③低学年及び中学年においては「仲間の目を見て話をしたり聴いたりすること」、④全学年を通して「仲間の話を最後まで聴くこと」、「不当な扱いを受けている仲間を庇ったり守ったりする」、及び「不適切な行動をしている仲間を止めたり諫めたりすること」の得点が低いこと、⑤5年生において「自分から仲間に話しかける」、この得点が低いこと、を踏まえ、低・中・高学年の発達とプログラム構成の全体像を、表1に纏めた(表1参照)。

表1 低学年・中学年・高学年児童の発達とプログラム構成の全体像

学年	仲間関係に関する発達の特徴	調査結果に示された課題	仲間関係促進に有効と考えられるプログラム構成
低 学 年	2～3人の親しい仲間 自己中心性の名残	必要な時にはっきりとした声で発言する 仲間の目を見て話をしたり聴いたりする 仲間の話を最後まで聞く 不当な扱いを受けている仲間をかばったり守ったりする 不適切な行動をしている仲間を止めたり諫めたりする	互いに存在を知り合う ・朝の挨拶りレー ・簡単な話し合い活動へつなげるための、ゲーム感覚のアイスブレイキング ・簡単な話し合い活動
中 学 年	4～5人の仲間集団 仲間関係重視 知的好奇心の萌芽	仲間の話を最後まで聞く 仲間の目を見て話をしたり聴いたりする 不当な扱いを受けている仲間をかばったり守ったりする 不当な行動をしている仲間を止めたり諫めたりする	相手との相性を知り合う ・朝の会の挨拶りレー ・自己紹介の工夫 ・話し合い活動へつなげるためのクイズ形式のアイスブレイキング ・話し合い活動

学年	仲間関係に関する発達の特徴	調査結果に示された課題	仲間関係促進に有効と考えられるプログラム構成
高 学 年	自立的態度の萌芽 仲間と自分との比較 学びの深化	自分から仲間に話しかける 必要な時にはっきりとした 声で発言する 仲間が何かを成し遂げたと きは一緒に喜ぶ 仲間の話を最後まで聞く 不当な扱いを受けている仲 間をかばったり守ったりす る 不適切な行動をしている仲 間を止めたり諫めたりする	互いに内面を知り合う ・朝の会の挨拶リレー ・自己紹介の工夫 ・ゲームを通して一人ひとりの 良さを認め合えるようなアイ スブレイキング ・話し合い活動の重視

アイスブレイキングは集団の緊張を緩和し、学習への参加準備を促す役割を果たすことから（渡部2008）、全ての児童活動導入部分に位置づけたところが本プログラムの特徴である。アイスブレイキングも大きく分けて2種類を設定した。一つ目は緊張を緩和するために声を出し身体を動かすことで元気が出ることを意図した内容として、ゲームを取り入れた。二つ目は、緊張は緩和させるが、気持ちを落ち着かせることを意図した内容として、声を出さないで活動できるものを取り入れた。これら二つの方法は、次の活動との組み合わせによって設定するよう工夫している。これは、学級内に少なくとも一人相互選択し認め合える仲間がいることにより、学校又は学級に適応していくことが出来るとされること（Barndt, T.J., &Ladd, G.W.1989）を拠り所としている。

IV. アイスブレイキング実施上の支援と評価の基本的観点

アイスブレイキングの特徴として、準備の必要がなく、短時間で実施できることが挙げられる。そのために、実施する際の支援と評価の基本的観点は次の通りである。

(1) プログラム実施における担任教師の支援

プログラム実施において心がけることは、①活動に対する端的な説明と、そのための②モデリングの導入、及び③児童による活動の重視である。従って、活動の導入部分では、デモンストレーションを取り入れながら、エクササイズの説明をする。活動が始まったら、必要に応じた支援をする。その上で活動時間を厳守することも大切である。

また、教師の姿勢として、教師自身が活動に積極的であることが重要となる。

なぜなら、教師の姿勢はそのまま児童に反映されるからであるが、更に、児童の心をアイスブレイクするためには、教師自身が安定した穏やかな心で臨むことが求められる。

(2) 評価の基本的観点

短時間で実施する活動であるから、振り返りの時間も長く取ることはできない。活動自

体は5～10分程度で実施するが、評価はそれよりも短い時間で実施するようにする。今回提示するプログラム例では、低学年と中学年において振り返りを児童の挙手による発言によって実施し、高学年においては児童の手のひらサイズである縦6cm横8cmのカードを使用し、活動の感想を記述する方法を取り入れた（図1参照）。

今回使用する絵カードには、例えば「自分の気持ち」と「仲間の様子」というように2種類の感想を書くことができるよう設定した。



図1 振り返り小カード例

V. 低学年・中学年・高学年におけるアイスブレイキングプログラムの具体例

ここでは、1日のはじまりとして重要視され、学級構成員である仲間と関わり合う最初の活動となる朝の会における「挨拶」の取り組み方について、表1に示したプログラム構成の全体像を基に作成された低学年・中学年・高学年用の活動を例示し、以下に示す。なお、これらの活動は、年度初めである4月に実施するものであることから、3学年共、学級の雰囲気や和らげることと学級構成員である仲間の存在を知ることを共通の目的としている。その上で、各学年に特徴的な課題を緩和または解決する方法を取り入れている。

表2は低学年の例である。低学年は、学級の実態に合わせて活動の段階を変えていくことが重要であるため、日数で区切らず、「ステップ」として表示している。

表2 低学年用 朝の会「挨拶」の進め方（第1ステップ）

活動名	先生の目を見て挨拶
ねらい	児童：担任の目を見る 担任：児童一人ひとりの様子を知る
1. 挨拶の言葉：担任「〇〇さん、おはよう。元気ですか？」 児童「ありがとう。元気です。」 2. 挨拶の仕方：担任は期間巡視 児童は着席して 3. 注意：担任は児童と平行な目線で挨拶する	
<p>* 巡回の順番を日替わりにすると楽しい</p>	

第2ステップ以降は以下のようなになる。

第2ステップ：友達の日を見て挨拶（担任の判断で次のステップに移る。）

第3ステップ：友達の日を見てにっこりしながら挨拶

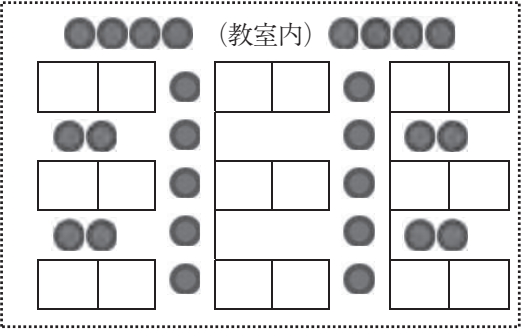
（第2ステップと同様、担任の判断で次のステップに移る。）

第4ステップ：友達の日を見てにっこりしながら元気に挨拶

以上である。

次に、「中学年の朝の会『挨拶』の進め方」第1日目の例を表3に示す。

表3 中学年用 朝の会「挨拶」の進め方（第1日目）

活動名	握手で挨拶！（片手で行う通常の握手）
ねらい	相手の目を見て活動する
担任の投げかけ：1分間にできるだけ大勢の人と握手をしよう。 注：相手の目を見ながら握手をし、自分の名前を紹介すること。教室内で実施し、必ず歩いて移動すること。	
<方法> 1. 教室の中を自由に歩き、1分間にできるだけ多くの人と握手をする。 2. 「おはよう〇〇です。よろしくね。」と言いながら相手の目を見てにこやかに握手をする。 3. 1分後、担任の合図で着席する。 4. 握手をした人数を確認した後、振り返りとして感想を聞く。	
	
□=児童用机 ○=児童	

第2日目以降は以下のようなになる。

第2日目～第4日目：いろいろ握手で挨拶！

（日替わりで握手の仕方を変える～両手で握手・右手で握手，左手で相手の肩をとんとんとたたき合う・人差し指タッチで握手・ハイタッチ握手等々～）

第5日目：組み合わせ握手で挨拶！—2ステップ目の活動—

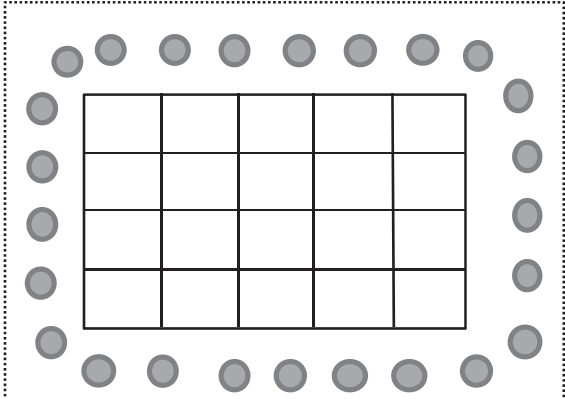
（第1日目から第4日目までに実施した握手を2種類組み合わせで実施する。）

第6日目以降：児童が考えた組み合わせ握手で挨拶！—3ステップ目の活動—

以上である。

続いて高学年用「朝の会『挨拶』の進め方」の第1日目の例を表4に示す。

表4 高学年用 朝の会「挨拶」の進め方(第1日目)

活動名	出席番号順の並び方を自分たちでつくろう!
ねらい	氏名順を構成していくために、互いに声をかけ合う。
教師の投げかけ：出席番号順に並んでみよう。 (支援)五十音順がわからなくなったときは教える。	
<方法> <ol style="list-style-type: none"> 1. 児童用机を教室の中央に寄せておく。 2. 児童がお互いに声をかけ合いながら机を囲んで氏名順に一重円を作っていく。 3. 出席番号一番の児童が誰かを確認する。 4. 出席番号一番の児童から、右隣に並んだ児童の名前を紹介する。 5. 振り返りは、一言カードに記述し、公開OKのものを帰りの会で紹介する。 	
	

第2日目以降は以下のようなになる。

第2日目：出席番号順に並んだ右隣の人の名前と、その人の得意なことまたは好きなものを1つ紹介しよう。(一週間の間にリサーチしておく。紹介したことをカードに書き、所定の場所に貼付する。)

第3日目：声を出さないうで、誕生月順に並んでみよう。(右隣に並んだ児童の名前と誕生月日を紹介していく。「私の隣の○○さんは、□月△日生まれです。」)

第4日目：1・2月，3・4月，5・6月，というように、二月ずつの生まれ月でチームを組み、お互いの得意なことや好きなものについてリサーチし合う。リサーチしたことをカードに書いて教室の所定の場所に貼付する。

以上である。

VI. 考察

今回は、低学年，中学年，高学年を担当するA市立小学校の教諭を対象とした悉皆調査で得た資料をもとに、解決を試みる児童の課題を算出し、朝の会に限定して課題解決に向けた取り組みを紹介した。

ここで、それぞれの学年における活動実施に関する注意事項について検討する。

低学年の朝の会において解決を試みる児童の課題は、「仲間の目を見て話をしたり聴いたりする」である。付随して学級構成員である仲間の存在を知ることも課題の一つとしている。

低学年では、児童が受けてきた幼児教育をも意識し、児童のペースにあわせて同じ活動を複数回実施し、ゆっくりと活動を進めていく。何度も同じことを繰り返すことによって課題を克服するスキルを身につけさせる。なお、この時期の児童にはモデリングが重要とされているため、第1ステップで担任がモデルとなり挨拶の仕方を示す。この際、児童の課題である「仲間（相手）の目を見る」ことに慣れさせるために、担任と見つめ合いながら挨拶をする。第2ステップからは児童同士で実施していくよう方向付ける例を提示する。ただし、活動を実施する時期を最初に区切るのではなく、あくまでも学級児童を主体とし、児童の仲間関係形成状況にあわせて同じ活動内容を継続したり継続期間を縮めたりすることが肝要であると考えられる。具体的には、担任との挨拶によって早期にアイコンタクトが十分取れるようになったことが確認された場合、次のステップである学級構成員同士の挨拶に移行するが、この時期の子どもの発達段階や、新しい環境に適應する時間が必要である場合を考慮し、仲間同士でも自然にアイコンタクトが取れるまで十分な時間をかけるなどが想定される。

中学年の朝の会において解決を試みる児童の課題は、「仲間の目を見て話をしたり聴いたりする」である。中学年の発達の特徴として、知的好奇心の萌芽が挙げられる3年生及び4年生になりたての4月にこの点を重視するのは、学級構成員である児童の現状に照らし合わせ、十分考慮すべきであるが、今回第1日目から第4日目までに例示した「握手」を組み合わせる活動などは、遊び感覚で実施することができるため、楽しみながら仲間関係を促進し、更には「知的好奇心の萌芽」に向けた発達を促す効果も期待できる。知的好奇心を促進させる手立てとしては、5日目以降に実施する組み合わせ握手がそれに当たると考えられる。握手の実施には、基本的に相手が必要であることから、二人組もしくは少人数のグループ活動を取り入れ、披露する段階において学級全体で共有するような場の設定をするとよい。

高学年の朝の会において解決を試みる課題は、「自分から仲間に話しかける」である。また、現在出席番号順は男女混合であることから、課題を解決するために児童の自助資源の一つである「男女の別なく話すことができる」を活用して、本プログラムを構成している。

高学年は、短期間に集中して実施することが望ましい。但し、行事等によりプログラムを組み込んだ朝の会の実施が困難であり、4月始めに毎日実施できない場合は、第1日目を出来る限り早期に実施し、第2日目以降は1週間おきなど流動的に実施しても良いと考える。また、紹介している第4日目以降の活動については、児童の係活動の一環として継続して実施していくことも可能である。

以上について配慮を試みながら開発したプログラムを実際に活用し、内容の是非を問いながら改善していくことが望ましいと考えられる。

Ⅶ. 今後の課題と展望

本研究は、佐野(2012)が実施した調査結果を受け、導出された課題を緩和させるための手立ての一つとして、具体的に小学校現場で活用できる学級集団育成プログラムの開発を行った。

今後は、これらを実際に学校現場で活用し、その成果と課題を追求していくことが望まれることから、実施を依頼し、活用に向けて快い回答を得られたA市立小学校において、来年4月に実施し、その効果を検討することになっている。

〔文献一覧〕

Barndt, T.J., & Ladd, G.W. Peer relationships in child development. New York: Wiley. 1989 p.5.

Gesell, A. THE CHILD FROM FIVE TO TEN 1946 須郷博・山下俊郎・大羽綾子・神山正治訳『学童の心理学』1967 pp.379-384, p.435.

犬塚文雄『子どもたちの生きる力を育む教育カウンセリング』福音社2000 pp.164-166.

野呂アイ「養護をめぐる幼小の連携から—小学生の放課後の生活と居場所を考える—」保育学研究46(1) 2008 pp.51-61.

大場幸夫・吉田洋子・中塚博勝・堀智晴・民秋言・永田栄一・中村悦子・岩堂美智子・大西俊江『子どもの発達と社会生活』朝倉書店1992 pp.44-45.

Shure, M.B., & Spivack, G. Means-ends thinking, adjustment, and social among elementary school-aged children. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 38 1972 pp.348-353.

佐野泉「児童の実態調査—小学校教諭に対して実施した児童の仲間関係に関する—『アイスブレイキング活用による学級集団育成に関する一考察』平成22年度・23年度東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科「研究プロジェクト」2013 pp.7-10

吉田辰雄「児童期・青年期の理解とその方法」『児童期・青年期の心理と生活』日本文化科学社1990 pp.28-29.